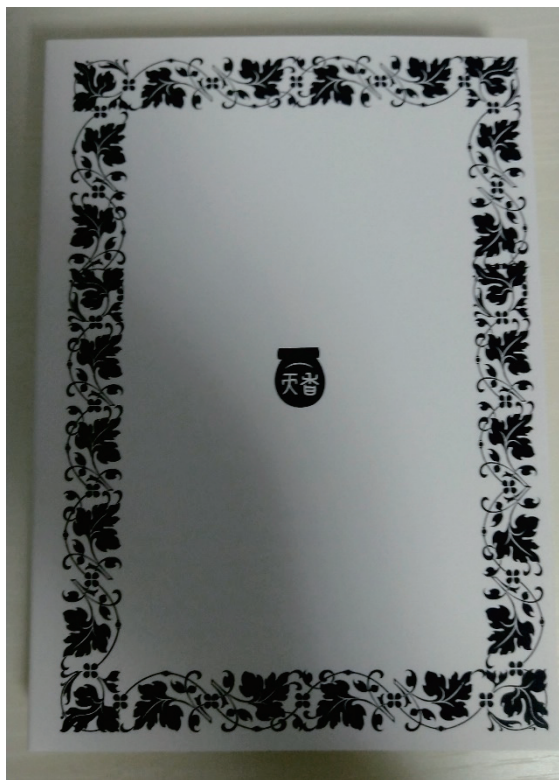
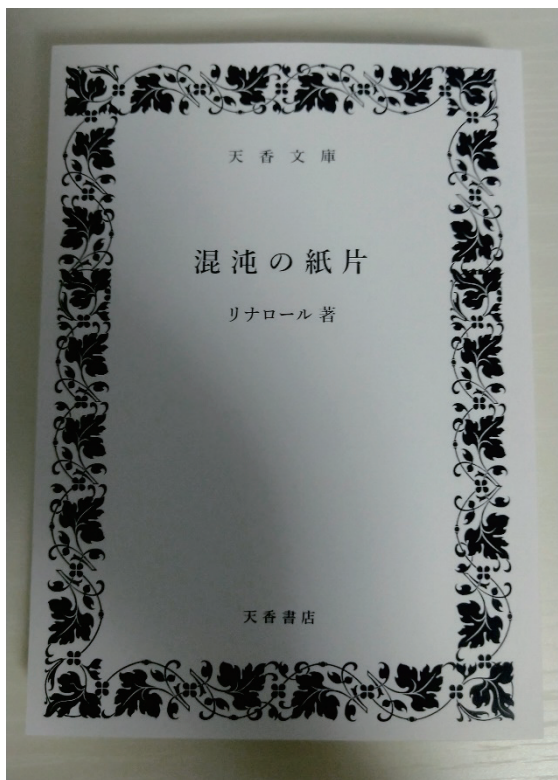
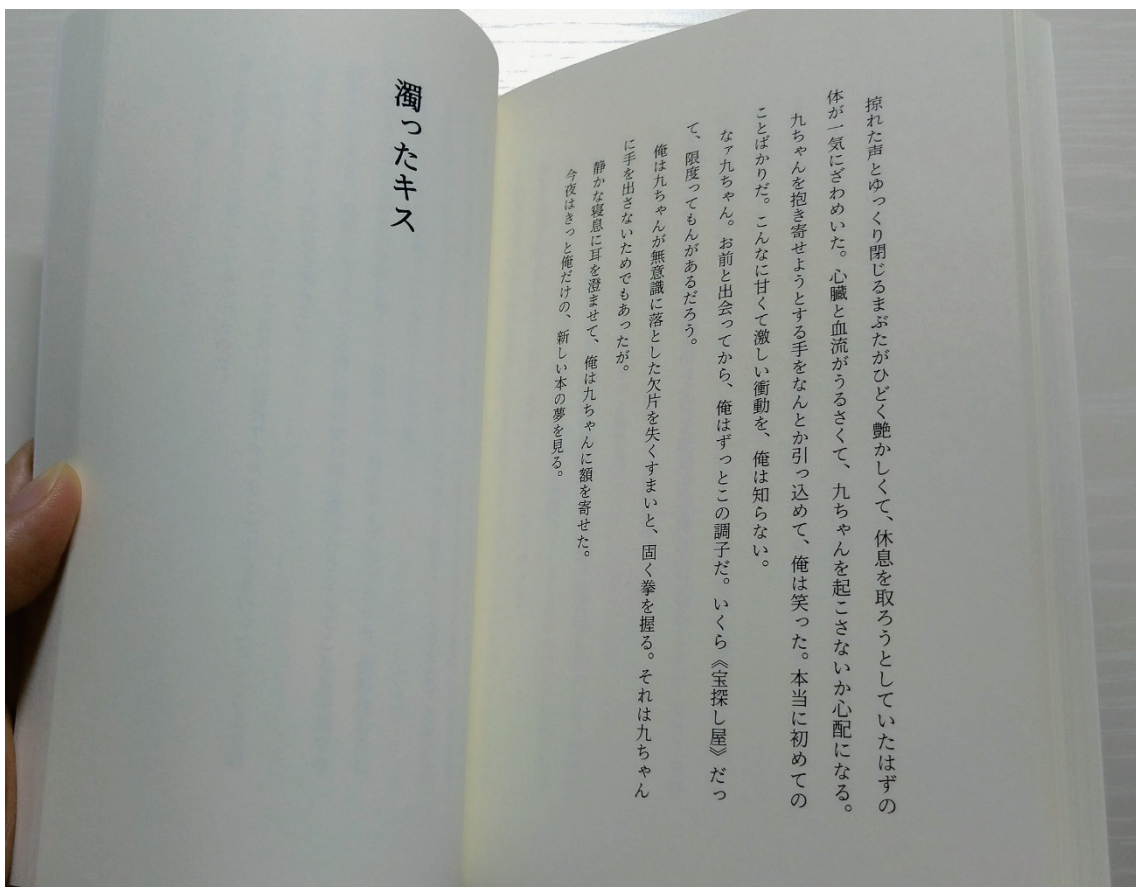




一般の文庫本に擬態したような表紙です。カバーはありません。



行間はゆったりめ、紙は厚めです。そしてノンブルがありません。ごめんなさい。

混沌の紙片

目次

37℃の心臓

祈りの傷跡

掌を知った

水面に映る幾望

紅い弾丸

心はまだ、掌の外

未明のラブレター

始まりはただ銀色

指先の向こう

あわいむらさき

しじまのうらに

その本に、新しい一頁を

濁ったキス

ヒュプノスの兄弟

花橘の香をかげば

羽ペンは踊る

夜明けを告げる声

あとがき

37
℃
の
心
臓

お守りが欲しい、とは以前から考えていた。

願いの込められたお守りは、戦争映画にはつきものだ。運命に翻弄される兵士たちは、大切な人から贈られたお守りを握りしめて死地へと向かう。映画においては大抵ドラマチックな死の小道具として使われるそれが、自分にはひどく羨ましかった。大切に思い合う誰かから、無事に戻ってくることを切に願われ、その証を手渡される。それは手に取れる形にした絆そのものだ。死の瞬間が輝くのは生に価値があるからだ、幾多の名シーンが語っていた。

これまでは、自分の生にそのような価値があるのかと自問することすら恐ろしかった。だが自分はある人に救われた。かつて大切な人と交わした約束を、あの人は取り戻してくれた。自分の生は、少なくともあの人に救われたという価値を得たのだ。

自分には無事に戻れと願いを込めてくれる誰かはいないから、せめてあの人との絆を形にしたかった。たとえ倒れても、あの人のために立ち上がる自分でありたい。自分自身

にそう約束したかった。

「あ……………、ありがとうごさいマスッ!!」

「ひとつしかあげないからね。大事にしてよ」

「も、モチロンでありマスッ!! 友情の証と思って大切にすでありマスッ!!」

自分の突然の申し入れに、あの人は快く応えてくれた。死者の書の一文が刻まれているという、心臓の護符だ。大事にしろと念を押されたが、もとより肌身離さず身につけるつもりであるから、紛失などするはずがない。

代わりに貰って欲しいと差し出した砲介九式を、あの人は笑って受け取ってくれた。砲介九式は自分が最も愛用していた改造銃であったから、まさか手放す日が来るとは思っていなかった。だが自分が最も信頼する武器をあの人に役立てて欲しいと、唐突に、しかし自然に考え付いたのだ。迷うことなくそう決めた自分の気持ちも、特別に価値のあるもの

のように思えてならなかった。

望んだ物を与えられ、想いを受け入れられたという事実に舞い上がり、それから自分が何と言ったか、あまりよく覚えていない。

異変が起きたのはその後だった。

六時限目の授業中、板書をしていた教員が突然動きを止めたと思ったら、教室のあちこちから呻き声が漏れ出したのだ。

苦しい声、頭痛を訴える悲鳴に混じって、あの人の名前が聞こえた。

「!？」

何故、と問うより前に理解する。得体の知れない何者かの意味が、あの人への憎悪を心に流し込もうとしてくるのが分かった。おそらく自分だけでなく、ここにいる全員がこの精神攻撃を受けている。